琉球大学学術リポジトリ

琉球宮古諸方言の音韻：琉球宮古方言の音声資料の収集・研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 狩俣繁久 公開日: 2009-02-25 キーワード (Ja): 琉球方言, 宮古諸方言, 平良方言, 音声資料 キーワード (En): RYUKYU DIALECTS, DIALECT OF MIYAKO ISLANDS, HIRARA DIALECT, DATA OF PHONETIC 作成者: 狩俣, 繁久, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8908

4．　平良方言の音声

4.1．はじめに

平良市は、宮古島、大神島、池間島、伊良部島、下地島、来間島、多良間島、水納島などの宮古諸島の中心である宮古島にある。かつては、首里王府の役所であった蔵元があり、現在は、沖縄県庁の宮古支庁がある。空港、港などがあり、文字どおりの政治経済の中心地である。平良市をふくむ宮古郡は、城辺町、上野村、下地町、伊良部町、多良間村の１市３町１村からなる。その人口は全体で５万３千人で、平良市の人口は３万７千人である。

平良（方言名／ｐ˥ｓａｒａ／）は古くは、市街地をなしていた東仲宗根、西仲宗根、西里、下里、荷川取の５箇字をさしていたようである。現在の「平良市」は、大神島や池間島をはじめとして、北の狩俣、島尻、南の久松（旧松原と旧久貝）など、方言的にはことなる地域をふくんでいる。ここでは、平良方言をせまい意味での、すなわち、旧市街地の五箇字の方言をさして使用することにする。この平良方言は、宮古諸方言の中央方言として周辺地域に対する影響力をもつ方言であり、この方言にはかつて士族とよばれた人々が使用した独特の語彙がある。その語彙のなかには、あきらかに沖縄方言の影響をうけていて、農村の人々の使用する方言には見られないものがふくまれているようである。

／ａｓａｇｉ／隠居した老夫婦が住む離れ。（／ʔａｓｊａｇｉ／首里方言）
／ｕｃ˥ｂａｒｕ／裏座敷。（／ʔｕｕｃｉｂａｒｕ／首里方言）
／ｇｕｓｉ：／御神酒。（／ｇｕｓｉｉ／（首里方言）
／ｄｉ：ｎｇｕ／梯梧。（／ｄｉｉｇｕ／（首里方言）、本来は／ｄｕｆｋ˥ｇｉ：／という。

注）平良方言は、本永守靖1974「平良方言の音韻法則」、本永守靖1978「平良方言の動詞の活用」などをはじめとして、宮古方言のなかでもっともよく調査、研究された方言であり、ことわざ集、歌謡集などのテキストも多い。

本稿では、平良市西里、下里での調査でえられた資料を中心にのべることにする。おもなインフォーマントは、砂川スエ氏（明治３９年生まれ、西里出身）、砂川トヨ氏（明治４３年生まれ、西里出身）、下地明増氏（大正７年生まれ、下里出身）、下地文氏（大正１２年生まれ、下里出身）の４名である。西里と下里

には、音韻論的な差異はなく、また、この方言における男女差は、語彙の面で、それぞれ詳しい分野があるといった程度の差である。

4.2. 平良方言のフォネーム

標準語の母音フォネームと子音フォネームを上村幸雄1978ではつぎのように定義している。

> 標準語の母音フォネームは、標準語の子音フォネームから、調音－音響的には、規範的な発音の代表的なアロフォンにおける、口蓋帆のもちあがったさまたげのない声道における声の共振と、その結果としてのおおきなきこえをもつ周期的で持続性のある音響とによって区別される。また、標準語の母音フォネームは、標準語の子音フォネームから機能的には、上の調音－音響的な特徴にもとづいて音節において音節主音となることによって、また、単独で音節を形成する能力をもつことによって区別される。さらにそのうえ、その音節が単独で単語または語彙的あるいは文法的に有意味的な単位となりうるという点でも区別される。

平良方言には、子音それ1個で2モーラの1音節を形成し、単独で単語をあらわす機能をもった子音フォネームがある。また、母音フォネームと結合せず、単独で1モーラの音節を形成して、語彙的、あるいは、文法的に有意味的な単位になることができる子音フォネームもある。

また、音節をひらく位置にきた子音と結合して、母音として、すなわち、音節主音として機能するが、摩擦音〔s〕〔z〕の調音と基本的にはおなじように、声道におけるさまたげ（舌先と硬口蓋とのせばめ）による噪音を特徴とするフォネームがある。平良方言のばあい、調音的な観点からも、機能的な観点からも、母音フォネームを子音フォネームから区別して明確に定義するのは、標準語のばあいとくらべても、奄美沖縄方言群のばあいとくらべてもむつかしい。

しかし、すべてのフォネームを母音フォネームと子音フォネームとに分割しなければならないとすれば、上村幸雄1978における標準語の母音フォネームの規定と比較しながら、平良方言の母音フォネームを規定すると、つぎのようになるだろう。

音節副音となる子音フォネームと結合して音節主音となり、1モーラの開音節を形成するフォネームを「みじか母音フォネーム」と規定し、2モーラの開音節を形成す

るフォネームを「なが母音フォネーム」と規定することができる。そして、それ以外のフォネームが子音フォネームである。母音フォネームは、単独で、あるいは、音節をひらく子音と結合して、音節主音になり、音節を形成することができる。そのとき、みじか母音フォネームは、音数律的に1モーラのみじかい音節を形成し、なが母音フォネームは、2モーラのながい音節を形成する。

平良方言は、モーラ（拍）にかぞえることのできる方言であるが、母音フォネームだけでなく、子音フォネームにも長短の対立があって、子音フォネームは「みじか子音フォネーム」と「なが子音フォネーム」にわかれる。

平良方言には、単独で2モーラのながい音節をつくることのできる子音フォネームがある。これが「なが子音フォネーム」である。なが子音フォネームは、他のフォネームと結合して音節を形成することはない。

みじか子音フォネームは、音節副音として音節をひらく位置にきて、母音と結合して音節を形成するばあいと、他のフォネームと結合することなく、単独で音節を形成するばあいとがある。音節副音として音節をひらく位置にしかくることのできない子音フォネームがある。これを「音節をひらく子音フォネーム」とよぶことにする。また、単独で音節を形成できるだけでなく、音節をひらく位置にもくることのできる子音フォネームがある。これを「音節をひらき、かつ音節をつくる子音フォネーム」とよぶ（以下では単に「音節をつくる子音フォネーム」とよぶ）。この「音節をつくる子音フォネーム」が単独で形成する音節は、1モーラのみじかい音節である。

また、音節をつくる子音フォネームは、音節副音として音節をひらく位置にきて、音節主音としての母音フォネームと結合して、音節をひらく子音フォネームとおなじように、音節を形成することもできる。なが母音フォネームと結合すれば、2モーラの音節を形成し、みじか母音フォネームと結合すれば1モーラの音節を形成することになる。

	単独で音節を形成できる	単独で音節を形成できない
音節をひらくことができる	音節をつくる子音フォネーム	音節をひらく子音フォネーム
音節をひらくことができない	なが子音フォネーム	

みじか母音フォネームをVで、なが母音フォネームをV：で、みじか子音フォネームをCで、なが子音フォネームをC：でしめすと、平良方言のフォネーム＝音節構造はつぎのようになる。

1音節1モーラ	C	／mim／耳、／kuv／昆布、／mta／土
	V	／aca／明日、／imi／夢、／utu／音
	CV	／sata／砂糖、／butu／夫、／jama／山
1音節2モーラ	C：	／v：／売る、／m：／芋、／n：／うん、肯定の応答
	V：	／a：／粟、／i：／胃、／u：／追う、／o：／青い
	CV：	／ka：／皮、／mi：／目、／pu：／帆

平良方言のフォネームは以下にしめすとおりである。

母音フォネーム

みじか母音フォネーム／ɿ，i，a，u／

なが母音フォネーム　／ɿ：，i：，e：，a：，o：，u：／

子音フォネーム

みじか子音フォネーム／p，b，t，d，k，g，c，z，f，v，s，m，n，r
pj，bj，tj，dj，kj，gj，cj，zj，fj，vj，sj，mj，nj，rj
j，kw，(w)，(h)／

なが子音フォネーム　／v：，m：，n：／

（注）平良方言をはじめとする宮古諸方言、そして、琉球列島諸方言のおおくの方言では、「手」「目」「葉」などの標準語の1モーラ1音節の単語に対応する単語の母音がなが母音化していて、1モーラ1音節の単語は存在せず、音声的にもっともちいさい単語は2モーラ1音節のものである。

（注）平良方言をはじめとする宮古諸方言では、形容詞の活用形のひとつに語幹をふたつかさねてつくるタイプがある。

／taka：taka／高い、　／upu：upu／大きい
／pisi：pisi／寒い、　／kaɿ：kaɿ／軽い
／iv：iv／重い、　／jam：jam／痛い

この形容詞の「畳語形」の最初の語幹の末尾は、なが母音フォネームになる。そして、当該の形容詞が程度強調をうけて発音されるとき、2モーラ以上に低く強くのばされる。母音をながく、しかもピッチは低く、強くのばす程度強調は、

形容詞に限らず、副詞や感動詞にもみられ、宮古諸方言に顕著である。

4.3. 母音フォネーム

平良方言の／ɿ／／ɿ：／は、舌先母音で、舌先あるいは前舌の舌先よりの部分を歯茎あるいは歯茎よりの硬口蓋に接近させてつくる母音である。上村幸雄1989がいうように、この母音の調音点は、D. Jones の母音四角形のそとにある。／i／／i：／と／e：／はともに前舌の母音で、／i／がせま母音で、／e／が半せま母音である。／a／／a：／は、ひろ母音である。／u／／u：／は奥舌のせま母音で、／o：／は奥舌の半せま母音である。／u／／u：／と／o／／o：／はともに円唇で、それ以外の母音は、非円唇の母音である。みじか母音フォネームには半せま母音がない。

平良方言の母音フォネームの特徴として、みじか母音フォネームがせま母音にかぎらず、ひろ母音も無声化することをあげることができる。この母音の無声化は、なが母音フォネームにはみられない。母音の無声化は、無声子音に挟まれたときだけでなく、語末でもおこる。ただし、語末での無声化は、義務的ではなく、ていねいに、ゆっくりと発音されるときには無声化しないことがある。

また、みじか母音の無声化は、平良方言話者のはなす標準語の発話のなかにも観察でき、方言には語例がない、みじかい半せま母音／e／／o／も無声化する。

標準語の母音フォネームと平良方言の母音フォネームの対応は、つぎのとおりである。（標準語との対応をしめすときに母音の長短を無視することがある。）

標準語 ―― 平良方言

／a／――／a／〔pana〕花・鼻、〔kạtana〕包丁（「刀」に対応）

／i／――／ɿ／〔pˢɿgi〕髭、〔pˢɿdaɿ〕左、〔pˢɿtu〕人

／u／――／u／〔uṣ〕牛、〔ju：〕湯、〔muku〕婿

／e／――／i／〔i：〕柄、〔pi：〕屁、〔mi：〕目、〔tạki〕竹

／o／――／u／〔puni〕骨、〔pu：〕帆、〔munu〕物

上の対応は基本的な対応であって、どんな子音と結合するかによって、すなわち音節によって、あるいはその音節がおかれる環境によって、いくつかのちがったタイプの音韻対応がみられるし、例外的な音韻対応もみられる。

4.3.1. 舌先母音／ɿ／／ɿ：／

平良方言の／ɿ／〔^{z}ɿ, ^{s}ɿ, ɿ〕は、舌先、あるいは前舌の舌先寄りの部分を歯茎あるいは歯茎寄りの口蓋に接近させ、そこでせばめをつくっている。舌先母音／ɿ／は、有声の破裂音／b／／g／と結合するときには、子音のでわたり＝母音のいりわたりに有声の摩擦音〔z〕が観察される。このアロフォンを〔^{z}ɿ〕と表記する。無声の破裂音／p／／k／と結合するときには、子音のでわたり＝母音のいりわたりに無声の摩擦音〔s〕がきかれる。このアロフォンを〔^{s}ɿ〕で表記する。無声子音にはさまれたり、語末にきたりして無声化した舌先母音／ɿ／のアロフォンを〔^{s}ɿ̥〕で表記する。このアロフォンが摩擦音〔s〕の調音と基本的におなじであることはさきにのべたとおりである。舌先母音／ɿ／の摩擦は、語頭の音節で呼気がつよくなり、語末では呼気のよわまりにともなって摩擦もよわくなる。摩擦のよわい、あるいは摩擦のないアロフォンを〔ɿ〕のように表記する。

舌先母音／ɿ／は、原則として標準語の／i／に対応してあらわれる。標準語の各行のイ段の音節と平良方言の音節の対応は以下のとおりである。

／i／ — ／ɿ／ 〔^{z}ɿ：〕飯、〔maɿ〕米（「米(まい)」に対応）
　　／i／ 〔iṇ〕犬、〔itsɿ̥tsɿ〕五つ、〔iftsɿ〕いくつ
／ki／ —／kɿ／〔k^{s}ɿmu〕肝、〔k^{s}ɿṇ〕着物（「衣(きぬ)」に対応）
／gi／ —／gɿ／〔ṃg^{z}ɿ〕右、〔mug^{z}ɿ〕麦
／si／ —／ṣ／ 〔uṣ〕牛、〔ṣta〕下
／zi／ —／zɿ／〔dzɿ：〕地、〔pidzɿ〕肘、〔ko：dzɿ〕麹
／ci／ —／cɿ／〔tsɿ：〕血、〔tsɿ̥kaf〕近く、〔ṃtsɿ〕道
／ni／ —／ni／〔ni：〕荷、〔ni：〕子、〔nidʒu：〕二十
　　／ṇ／ 〔kaṇ〕蟹、〔dʒiṇ〕お金（「銭(ぜに)」に対応）
／hi／ —／pɿ／〔p^{s}ɿgi〕髭、〔p^{s}ɿdaɿ〕左、〔p^{s}ɿ̥tu〕人
／bi／ —／bɿ／〔kab^{z}ɿ〕紙（「カビ」に対応）
／mi／ —／mi／〔mi：tsɿ〕三つ、〔miṃ〕耳
　　／ṃ／ 〔ṃtsɿ〕道、〔ṃdzu〕溝、〔miṃ〕耳
／ri／ —／ɿ／ 〔tuɿ〕鳥、〔ma：ɿ〕毬

また、標準語の「ツ」「ズ（ヅ）」の音節にふくまれる奥舌せま母音／u／に対応して、平良方言では舌先母音／ɿ／があらわれる。標準語の「ル」に対応する音節にも／ɿ／があらわれる。

／ｃｕ／ ―／ｃɿ／〔tsɿｍｉ〕爪、〔tsɿｎｕ〕角、〔ts^{s}ɿｋ^{s}ɿ〕月
／ｚｕ／ ―／ｚɿ／〔ｋｉdzɿ〕傷、〔ｍｉdzɿ〕水
／ｒｕ／ ―／ɿ／ 〔ｐｉ^{z}ɿ〕ニンニク（蒜(ひる)に対応）、〔ｊｕ^{z}ɿ〕夜

舌先母音／ɿ／は、結合する子音フォネームに制限がある。破裂音／ｋ，ｇ，ｐ，ｂ／、破擦音／ｃ，ｚ／とは結合するが、その他の子音フォネームとは結合しない。すなわち、平良方言には、／ｆɿ／／ｖɿ／／ｍɿ／／ｎɿ／／ｒɿ／／ｊɿ／／ｗɿ／などの音節は存在しないのである。

なが母音／ɿ：／は、つぎのような単語にあらわれる。
①標準語の１音節語に対応して。
〔ｂ^{s}ɿ：〕亥（十二支）、〔dzɿ：〕地面、〔dzɿ：〕痔

②形容詞の畳語形のなかに。
〔ｓａｂ^{z}ɿ：ｓａｂ^{z}ɿ〕さっぱりした、〔ｎａｂ^{z}ɿ：ｎａｂ^{z}ɿ〕すべっこい
〔atsɿ：atsɿ〕暑い

③その他の語例
〔ｇ^{z}ɿ：ｐａ〕かんざし、〔^{z}ɿ：ｓａ〕啞、〔ｋ^{s}ɿ：ｂａ：〕牙、八重歯
〔ｂ^{z}ɿ：〕坐る、〔ｂ^{z}ɿ：ｋｕɲｊａ^{z}ɿｚｕ〕鮃、〔tsɿ：ｂɿ〕交尾

4.3.2. 前舌せま母音／ｉ／／ｉ：／

前舌せま母音／ｉ／／ｉ：／は、非円唇の母音である。原則として、標準語の／ｅ／に対応してあらわれる。標準語の各行のエ段の音節と平良方言との対応はつぎのとおりである。

標準語　　平良方言
／ｅ／ ― ／ｉ／ 〔ｉ：〕柄、〔ｋｕｉ〕声、〔ｍａｉ〕前
／ｋｅ／ ―／ｋｉ／〔ｋｉ：〕毛、〔ｔ̪ａｋｉ〕竹
／ｇｅ／ ―／ｇｉ／〔ｋａｇｉ〕影、〔ｐ^{s}ɿｇｉ〕髭
／ｓｅ／ ―／ｓｉ／〔aʃｉ〕汗、〔ｋｉ̞ʃｉ̞ɿ〕煙管

／ｚｅ／ ―／ｚｉ／〔ｋａdʒｉ〕風、〔dʒｉṇ〕銭
／ｔｅ／ ―／ｔｉ／〔ｔｉ：〕手、〔ｕｔｕ〕音
／ｄｅ／ ―／ｄｉ／〔ｕｄｉ〕腕、〔ｓｕｄｉ〕袖
／ｎｅ／ ―／ｎｉ／〔ｎｉ：〕根、〔ｐｕｎｉ〕骨
／ｈｅ／ ―／ｐｉ／〔ｐｉ：〕屁、〔ｐｉｒａ〕へら
／ｂｅ／ ―／ｂｉ／〔ｎａｂｉ〕鍋、〔ｊｕｂｉ〕昨夜
／ｍｅ／ ―／ｍｉ／〔ｍｉ：〕目、〔ｍａｍｉ〕豆
／ｒｅ／ ―／ｒｉ／〔ａｒａｒｉ〕霰

前述したように、標準語の前舌せま母音／ｉ／に対応するのは、基本的には舌先母音／ɿ／であるが、音節によって、また単語によっては、／ɿ／にならず、／ｉ／のままあらわれるばあいもある。とくに、標準語の語頭にあらわれる／ｍｉ／／ｎｉ／／ｉ／は、平良方言でも／ｍｉ／／ｎｉ／／ｉ／であらわれる。

標準語	平良方言	
／ｎｉ／ ―	／ｎｉ／	〔ｎｉ：〕荷、二、子（十二支の一つ）
	／ṇ／	〔ｋａṇ〕蟹、〔ｕṇ〕鬼
／ｍｉ／ ―	／ｍｉ／	〔ｍｉ：tsɿ〕三つ、〔ｍｉṃ〕耳
	／ṃ／	〔ｍｉṃ〕耳、〔ｋａṃ〕神、〔ṃtsɿ〕道
／ｉ／ ―	／ｉ／	〔ｉṇ〕犬、〔ｉʈtsɿ〕いくつ、〔ｉtsɿ〕いつ
	／ɿ／	〔ᶻɿ：〕飯、〔ｍａᶻɿ〕米(マイ)

また、「木」「起きる」の〔ｋｉ〕が〔ｋɿ〕とならず、〔ｋｉ〕となる。上代特殊仮名遣いの乙類の「き」が琉球列島諸方言で甲類の「き」とちがった変化をすることがある。原則として、標準語の／ｋｉ／に対応する平良方言の音節は、／ｋɿ／であり、標準語の／ｋｅ／に対応する平良方言の音節は／ｋｉ／である。しかし、つぎのふたつの単語はその例外となるものであり、この単語はすべての琉球列島諸方言で同様な形であらわれる。

／ｋｉ：／木
／ｕｋｉɿ／起きる

ただし、乙類の「キ」がすべてこのようにあらわれるわけでもなく、また、上代特殊仮名遣いの甲乙の区別が平良方言をはじめとする宮古諸方言で完全にたもたれてい

るというわけでもないようである。

みじか母音／ｉ／には、無声化したアロフォン〔ɨ̥〕がある。無声化した〔ɨ̥〕は、無声子音にはさまれたときにあらわれるほか、語末、文末でもあらわれる。

〔ｋɨ̥ｔａ〕桁、〔ｋɨ̥ʃｉ^{z}ɹ〕煙管、〔ｐɨ̥ｔａ〕下手、〔ｐɨ̥ʃｉ〕干瀬
〔ʃɨ̥ｋｉɲ〕世間、〔ｐɨ̥ʃɨ̥ｓａ〕寒さ、〔ａʃɨ̥〕汗

後続する音節が／ｓｉ／〔ʃｉ〕のばあい、無声化する前舌せま母音／ｉ／〔ɨ̥〕のアロフォンとして〔ʃ〕があらわれることがある。この〔ʃ〕は、音節主音として機能しているようである。

／ｋｉｓｉ／〔ｋɨ̥ʃｉ〕～〔ｋʃʃｉ〕切って（動詞の第二なかどめ）
／ｐｉｓｉｓａ／〔ｐɨ̥ʃｉｓａ〕～〔ｐʃʃｉｓａ〕寒さ

同様に、先行する子音が有声音のとき、あるいは後続する子音が摩擦音〔ʒ〕のとき、前舌せま母音／ｉ／のアロフォンとして摩擦音〔ʒ〕があらわれることがある。これも、摩擦音〔ʒ〕が音節主音として機能しているようにみえる。

／ｂｉʒｉ／〔ｂｉʒｉ〕～〔ｂʒʒｉ〕座れ（動詞の命令形）
／ｉʒｉ／〔ｉʒｉ〕～〔ʒʒｉ〕入れて（動詞の第二なかどめ）

この現象は、後続する音節／ｓｉ／〔ʃｉ〕の逆行同化(regressive assimilation)によって生じたともかんがえられる。あるいは、〔^{z}ɹʒｉ〕というアロフォンがしばしばみられることから推察すると、語頭におけるつよい呼気によって、前舌面がさらに前におしやられて、舌先母音／ɹ／が発生し、その舌先母音の進行同化によって後続の子音を摩擦音化させたのちに、こんどは後続する子音の逆行同化によって〔ʃ〕〔ʒ〕になり、さらに、前舌せま母音／ｉ／に変化させたのかもしれない。ここでも空気力学的な条件がつよくはたらいている。

*ｉｒｅ → ^{z}ɹｒｉ → ^{z}ɹʒｉ → ʒʒｉ

なが母音フォネーム／ｉ：／はつぎのようなばあいにあらわれる。

①標準語の１音節語に対応して。

〔ｔｉ：〕手、〔ｋｉ：〕毛・木、〔ｐｉ：〕屁、〔ｎｉ：〕根・子（十二支）

〔ｍｉ：〕目・巳（十二支）

②語幹末が／ｉ／でおわる形容詞の畳語形の前半の語幹末の子音フォネームがなが母音／ｉ／であらわれる。

〔ｐɨʃｉ：ｐɨʃｉ〕寒い、〔ｉｍｉ：ｉｍｉ〕小さい

〔ｐｕｒｉ：ｐｕｒｉ〕ばかな

③標準語のエ段長音に対応して。

〔ʃｉｎʃｉ：〕先生、〔ʃｉ：ｔｕ〕生徒、〔ｋｉ：ｓａｔsɹ〕警察

〔ｋｉ：ʃɨtsɹ〕啓蟄、〔ｔʉｋｉ：〕時計

④その他の語例

〔pˢɹｔｉ：tsɹ〕一つ、〔ｍｉ：tsɹ〕三つ

4.3.3. 前舌半せま母音／ｅ／／ｅ：／

前述したように、標準語の／ｅ／に対応する平良方言の母音は／ｉ／なので、みじか母音の／ｅ／は、原則としてみられない。また、なが母音／ｅ：／も、つぎの単語にあらわれるだけである。。

(1)語幹末が／ｉ／でおわる形容詞の畳語の程度強調をうけた形のなかにみられる。程度強調をうけないときは、／ｉ：／である。

〔ｐｉʃｅ：ｐｉʃｉ〕寒い、〔ｉｍｅ：ｉｍｉ〕小さい

(2)その他の語例

〔ｇｕｄｅ：ｇｕｋｋｕ〕鶏の鳴き声（擬声語）

4.3.4. ひろ母音／ａ／／ａ：／

平良方言のひろ母音／ａ／／ａ：／の調音は、標準語のそれとほぼおなじである。平良方言のばあい、さきにものべたように、みじかいひろ母音／ａ／は、語頭の音節で、しかも無声子音にさきだたれ、かつ後続する子音も無声子音であるばあい、無声化したアロフォンであらわれる。ひろ母音／ａ／の無声化は、せま母音の無声化にく

らべて義務的ではなく、無声化しないこともおおい。

ひろ母音／ａ／は、原則として、標準語の／ａ／に対応してあらわれる。標準語の各行のア段の音節と平良方言の音節との対応は、以下のとおりである。

標準語	平良方言
／ａ／	／ａ／〔ａｔｓａ〕明日、〔ａｋａ：ａｋａ〕赤い
／ｋａ／	／ｋａ／〔ｋą̣ｓａ〕笠、〔ｋą̣ｔａ〕肩
／ｇａ／	／ｇａ／〔ｋａｇａm̩〕鏡、〔ｇａｋˢɿ〕餓鬼（食いしん坊）
／ｓａ／	／ｓａ／〔ｓą̣ｔａ〕砂糖、〔ｓą̣ｋｉ〕酒
／ｚａ／	／ｚａ／〔ｋａｄｚａṣｍｕ〕風下、〔tʃｕ：ｄｚａｒａ〕中皿
／ｔａ／	／ｔａ／〔ｔą̣ｋａ〕鷹、〔ｔą̣ｋｕ〕蛸、〔ʈｔａ〕蓋
／ｄａ／	／ｄａ／〔ʈｄａ〕札、〔ｐａｄａｋａ〕裸、〔ｄａｍｉ〕駄目
／ｎａ／	／ｎａ／〔ｎａｄａ〕涙、〔ｎａｔｓɿ〕夏、〔ｐａｎａ〕花、鼻
／ｈａ／	／ｐａ／〔ｐａｎａ〕花、鼻、〔ｐą̣ｋａ〕墓、〔ｐą̣ｓａm̩〕鋏
／ｂａ／	／ｂａ／〔ｂａｓｏ：〕芭蕉、〔ｂａʃａ〕馬車
／ｍａ／	／ｍａ／〔ｍａｔａ〕股、〔ｍａｍｉ〕豆、〔ṣｍａ〕島
／ｒａ／	／ｒａ／〔ｓａｒａ〕皿、〔ｂａｒａ〕藁、〔ｍｕｒａ〕村
／ｗａ／	／ｂａ／〔ｂａｒａ〕藁、〔ｂａｋａｍｕｎｕ〕若者

なが母音の／ａ：／はつぎのようなばあいにあらわれる。

①標準語の１音節語に対応して。

〔ｔａ：〕田、〔ｎａ：〕名、〔ｐａ：〕歯、〔ｎｉ：〕根

②語幹末に母音／ａ／があらわれる形容詞の畳語形のなかに。

〔ａｋａ：ａｋａ〕赤い、〔ｔą̣ｋａ：ｔą̣ｋａ〕高い

〔ｂａｋａ：ｂａｋａ〕若い、〔ｊａｐａ：ｊａｐａ〕柔らかい

〔ａɣｖａ：ａɣｖａ〕脂っこい、〔ｉｋｊａｒａ：ｉｋｊａｒａ〕少ない

③標準語の／-ａｗａ／という音声連続の／ｗ／が、平良方言では脱落して、なが母音／-ａ：／であらわれる。

〔ｎａ：〕縄、　〔ｋａ：〕皮、川（井戸の意味）、〔ａ：〕粟

〔ｕｋˢɿｎａ：〕沖縄、〔ｔａ：ｒａ〕俵

④標準語のハ行四段動詞に対応する平良方言の動詞のうち、代表形（いわゆる終止

形）の語尾に母音／ｏ：／を含む動詞の「さそいかける形」の語尾

〔ｋｏ：〕買う　　〔ｋａ：〕買おう

〔ａｒｏ：〕洗う　　〔ａｒａ：〕洗おう

〔ｆｏ：〕食う　　〔ｆａ：〕食おう

⑤同じく上記の動詞の否定の形の語尾に。（これは③の現象とも重なる。）

〔ｋｏ：〕買う　　〔ｋａ：ɲ〕買わない

〔ａｒｏ：〕洗う　　〔ａｒａ：ɲ〕洗わない

〔ｆｏ：〕食う　　〔ｆａ：ɲ〕食わない

〔ｐｏ：〕這う　　〔ｐａ：ɲ〕這わない

⑥みじか母音／ａ／でおわる名詞にとりたての助詞〔-ｊａ〕のついた形

〔ｐａｎａ〕鼻、　　〔ｐａｎａ：〕鼻は

〔ｂａｔａ〕腹、　　〔ｂａｔａ：〕腹は

〔ｓａｎａ〕傘、　　〔ｓａｎａ：〕傘は

〔ɲｎａｍａ〕今、　　〔ɲｎａｍａ：〕今は

⑦みじか母音／ｉ／でおわる名詞にとりたての助詞〔-ｊａ〕のついた形

〔ｐａｎｉ〕羽、　　〔ｐａɲｊａ：〕羽は

〔ｓａｋｉ〕酒、　　〔ｓａｋｊａ：〕酒は

〔ａｍｉ〕雨、　　〔ａɱｊａ：〕雨は

〔ｊａｒａｂｉ〕子供　　〔ｊａｒａｂｊａ：〕子供は

このばあい、結合する子音（語幹末の子音）は、口蓋音化した子音フォネームになる。

⑧その他

〔ʃａ：ｋａ〕早朝、〔ｍａ：ｍａ〕継母、〔ｐｊａ：ｐｊａ：〕早い

〔ɲｋｊａ：ɲ〕昔

4.3.5. 奥舌半せま母音／ｏ／／ｏ：／

この奥舌半せま母音／ｏ／／ｏ：／は円唇である。前述したように標準語の／ｏ／に対応する平良方言の母音は／ｕ／なので、みじか母音の／ｏ／は、原則としてみら

れない。また、なが母音／ｏ：／は、つぎのようなばあいにあらわれる。

(1)二重母音／ａｏ／／ａｕ／が融合してなが母音／ｏ：／があらわれる。

〔ｏ：〕青、〔ｓｏ：〕竿、〔ｔｏ：ʂ〕倒す、〔ｎｏ：ʂ〕直す

〔ｂｏ：〕棒、〔ｋｏ：〕線香、〔ｔｏ：〕中国（唐に対応）

(2)古代日本語のハ行四段動詞の語幹末が／ａ／になる動詞の終止形の語尾にあらわれる。

〔ｋｏ：〕買う、〔ａｒｏ：〕洗う、〔ｂａｋｏ：〕奪う、〔ｐｏ：〕這う

〔ｆｏ：〕食べる（食らうに対応）

(3)みじか母音／ｕ／でおわる名詞のとりたて〔-ｊａ〕のかたち

〔ｂｕｔｕ〕夫　　〔ｂｕｔｏ：〕夫は

〔ｍｕｋｕ〕婿　　〔ｍｕｋｏ：〕婿は

〔ｎｕｎｕ〕布　　〔ｎｕｎｏ：〕布は

(4)みじか母音／ａ／でおわる名詞の対格〔-ｊｕ〕のかたち

〔ｓａ̯ｔａ〕砂糖　　〔ｓａ̯ｔｏ：〕砂糖を

〔m̩ｍａ〕祖母　　〔m̩ｍｏ：〕祖母を

〔ｂｕｂａ〕伯母　　〔ｂｕｂｏ：〕伯母を

(5)語幹末が／ｕ／でおわる形容詞の畳語形の程度強調をうけた形

〔ｕｐｏ：ｕｐｕ〕大きい、〔ɸｆｏ：ɸｆｕ〕黒い、〔ʂｓｏ：ʂｓｕ〕白い、〔ｍａ：ｋｏ：ｍａ：ｋｕ〕丸い、〔pˢɿｓｏ：pˢɿｓｕ〕広い

(6)その他の語例

〔ｐｏ：kˢɿ〕箒、〔ｂｏ：〕童名（王[ワウ]に対応）、〔ｔｏ：〕誰

〔ｄｏ：dzɿ：ｄｏ：dzɿ〕上手、〔ｋｏ：ｋｏ：〕貧しい、〔ｇｏ：ｒａ〕苦瓜、〔ｐｕdzｏ：〕煙草入れ、〔ｓｏ：ｋｉ〕笊、〔ｍｏ：ｋｉ〕儲け

〔ｎｏ：〕何、〔ｊｏ：ｊｏ：〕弱い、〔ｏ：〕喧嘩、〔ｏ：gɿ〕扇

〔ｔｏ：ɸ〕豆腐、〔ｂｉｇｏ：ｂｉｇｏ：〕痒い

4.3.6. 奥舌せま母音／u／／u：／

奥舌せま母音／u／〔u〕の典型的なアロフォンは上下の唇をつきだすように丸めた母音である。とくに、／su／〔su〕、／cu／〔tsu〕、／zu／〔dzu〕などの舌先の摩擦音、破擦音と奥舌せま母音／u／が結合するばあい、くちびるでの丸めは顕著である。

平良方言の／u／は標準語の母音／o／および／u／に対応してあらわれる。ただし、標準語のウ段に対応する音節のばあい、後述のように、先行する子音の条件によって、平良方言において母音／u／が脱落して成節的な子音に変化したり、舌先母音／ɿ／に変化したりして、オ段の音節との対応ほど顕著なものではない。

(1)標準語の各行のオ段の音節と平良方言の音節との対応はつぎのとおりである。

標準語　　平良方言
／o／ — ／u／　〔uja〕親、〔uɲ〕鬼
／ko／ —／ku／〔kumi〕米、〔kui〕声、〔muku〕婿
／so／ —／su／〔sʉku〕底、〔sudi〕袖
／zo／ —／zu／〔ɱzu〕溝、〔kudzu〕去年[コゾ]
／to／ —／tu／〔tuɿ〕鳥、〔butʉtuɿ〕おととい
／do／ —／du／〔duru〕泥、〔duku〕毒、〔buduɿ〕踊り
／no／ —／nu／〔nunu〕布、〔tsɿnu〕角、〔bu：nu〕斧
／ho／ —／pu／〔puni〕骨、〔pu：〕帆、穂、〔upuni〕大根
／mo／ —／mu／〔mu：〕藻、〔mumu〕腿、〔kˢɿmu〕肝
／jo／ —／ju／〔juɿ〕夜、〔jumi〕嫁、〔juku〕横
／ro／ —／ru／〔iru〕色、〔ɟkuru〕袋、〔duru〕泥

(2)標準語の各行のウ段の音節と平良方言の音節との対応はつぎのとおりである。

標準語　　平良方言
／u／ — ／u／　〔uʂ〕牛、〔udi〕腕、
／mu／ —／mu／〔muku〕婿、〔muʂ〕虫
／ju／ —／ju／〔ju：〕湯、〔juɱ〕弓
／nu／ —／nu／〔nunu〕布、〔nuʂtu〕盗人

標準語の／ｓｕ／／tsu／／dzu／および／ｒｕ／、すなわち、舌先音と母音／ｕ／とが結合した音節に対応する平良方言の音節の母音は／ｕ／ではなく、／ɿ／に変化しているか、あるいは／ɿ／からさらに変化して母音を消失させている。

標準語　　平良方言
／ｓｕ／――／ʂ／　〔ʂｓɿ〕巣、〔ｕʂ〕臼
／tsu／――／tsɿ／〔tsɿｎｕ〕つの、〔tsɿｍｉ〕爪、〔ｔʂtsɿ〕辰
／dzu／――／dzɿ／〔ｍｉdzɿ〕水、〔ｋｉdzɿ〕傷
／ｒｕ／――／ɿ／　〔ｊｕ^{z}ɿ〕夜、〔ｓａ^{z}ɿ〕申（十二支）

また、標準語の／ｋｕ／／ｇｕ／／ｈｕ／／ｂｕ／に対応する平良方言の音節は、＊ｋｕ・ｐｕ＞＊ｆｕ＞ɸ、＊ｇｕ・ｂｕ＞＊ʋｕ＞ɣのように奥舌せま母音／ｕ／を脱落させ、成節的な子音に変化している。

標準語　　平良方言
／ｋｕ／――／ɸ／〔ɸｍｕ〕雲、〔ɸｓａ〕草、〔ｍａɸｆａ〕枕
／ｇｕ／――／ɣ／〔ｄｏ：ɣ〕道具
／ｈｕ／――／ɸ／〔ɸｎｉ〕船、〔ｔｏ：ɸ〕豆腐
／ｂｕ／――／ɣ／〔ａɣｖａ〕油、〔ｐａʋ〕蛇（「ハブ」に対応か）

単独で語中にあらわれる標準語の母音／ｏ／／ｕ／に対応する平良方言のばあい、先行する母音と融合するので、語中に単独の／ｕ／があらわれることはない。

なが母音／ｕ：／は、つぎのようなばあいにあらわれる。
①標準語の１音節語に対応して。
〔ｐｕ：〕帆、穂、〔ｎｕ：〕野、〔ｍｕ：〕藻、〔ｋｕ：〕粉

②語幹末の母音が／ｕ／になるタイプの形容詞の畳語形の程度強調をうけない形。
程度強調をうけると、前半の語幹末の母音が／ｏ：／になることがある。
〔ｕｐｕ：ｕｐｕ〕大きい、〔ｍａ：ｋｕ：ｍａ：ｋｕ〕丸い
〔ｐ^{s}ɿｓｕ：ｐ^{s}ɿａｓｕ〕広い、〔ɸｆｕ：ɸｆｕ〕黒い

③古代日本語のｅｈｕ，ｅｗｏ，ｏｈｏ，ｏｈｕ，ｏｗｏなどが融合して。
〔kjｕ：〕今日、〔bjｕ：〕酔う、〔mjｕ：ｔｕ〕夫婦

〔kˢɹnu：〕昨日、〔tu：tu：〕遠い、〔tu：〕十

④みじか母音／u／でおわる名詞の対格〔-ju〕のかたち

〔mumu〕腿、　〔mumu：〕腿を

〔butu〕夫、　〔butu：〕夫を

〔duru〕泥、　〔duru：〕泥を

⑤みじか母音／i／でおわる名詞の対格〔-ju〕のかたち

〔jumi〕嫁　〔jumju：〕嫁を

〔puni〕骨　〔punju：〕骨を

〔sudi〕袖　〔sudju：〕袖を

このばあい、結合する子音（語幹末の子音）は口蓋音化した子音フォネームになる。

⑥ハ行四段動詞で語幹末の母音がuでおわるタイプの動詞

〔ku：〕乞う、〔nu：〕縫う、〔juku：〕休む、〔umu：〕思う

ただし、<言う>は〔aᶻɹ〕となっていて、例外。

⑦その他の語例

〔pu：〕帆、〔bu：gᶻɹ〕砂糖黍、〔tu：tu：〕遠い、〔du：〕胴、〔ku：muja〕ゴキブリ、〔gu：〕仲間、〔su：〕潮、〔dzu：〕さあ（よびかけ）、〔tsu：tsu：〕強い、〔mu：〕ホンダワラ（海草）、〔nu：ma〕馬、〔ju：〕湯、〔u：du〕布団

4.3.7. 二重母音について

奄美沖縄方言群において標準語の／ai／／ae／／ue／などの二重母音が融合するのとちがって、平良方言では、これらの二重母音が融合せず、平良方言では、つぎのような二重母音がみられる。

	前	蠅	上
平良方言	〔mai〕	〔paᶻɹ〕	〔ui〕
首里方言	〔me：〕	〔Φe：〕	〔ʔwi：〕
名瀬方言	〔më：〕	〔Φë：〕	〔ʔwï：〕

平良方言の二重母音は、つねに前にくる母音がひろい母音で、後にくる母音がせまい母音である。

／ａｉ／　〔ａｉｍｕｎｕ〕あえ物、〔ｍａｉ〕前、〔ｐａｉ〕南、〔ｋａｉ〕彼
〔ｋａｉｎａ〕腕、〔-ｍａｉ〕-も（助詞）、〔ｎａｉ〕地震
〔ｆａｉ〕食え、〔ｋａｉ〕買え、〔ｋａｉｂａ〕買えば、

／ａɿ／　〔ｍａ^{z}ɿ〕米、〔ｐａ^{z}ɿ〕蠅、〔ｕｔｕｇａ^{z}ɿ〕顎、〔ʃʃａ^{z}ɿ〕白蟻
〔ｋａｒａｐａ^{z}ɿ〕灰、〔ａｇａ^{z}ɿ〕東、〔ｂｕｎａ^{z}ɿ〕姉妹
〔ｓａｇａï〕下がる、〔ｔａｍａ^{z}ɿ〕溜まる、

／ｕｉ／　〔ｕｉ〕上、〔ｕｉｐ^{s}ʅｔｕ〕老人、〔ｍｕｉdzｏ：ｋｉ〕箕
〔ｋｕｉ〕声、〔ｎｕｂｕｉ〕首
〔ｕｂｕｉｒｕ〕覚えろ、〔ｋｕｉｒｕ〕越えろ

／ｕɿ／　〔ｍｕ^{z}ɿ〕森、〔ʂｎｕ^{z}ɿ〕モズク（海草）、〔ｔｕ^{z}ɿ〕鶏、〔ｊｕ^{z}ɿ〕夜、〔ｎｕ^{z}ɿ〕糊、〔ｍｉｄｕ^{z}ɿ〕木の芽、〔ｆｕ^{z}ɿｍａｂｏ：〕
〔ｔｕ^{z}ɿ〕取る、〔ｍｕ^{z}ɿ〕盛る、〔ｂｕ^{z}ɿ〕折る、〔ｐｕ^{z}ɿ〕掘る

／ｉɿ／　〔ｉ^{z}ɿ〕西、〔ｉ^{z}ɿ〕錐、〔ｎｕｂｉ^{z}ɿ〕野蒜、〔ｍｉ^{z}ɿ〕（魚などの）身、〔ｉ^{z}ɿｋｉ〕鱗、〔ｐｉ^{z}ɿ〕ニンニク、〔ｐｉ^{z}ɿ〕針
〔ｕｋｉ^{z}ɿ〕起きる、〔ｔａｔｉ^{z}ɿ〕立てる、〔ｉｂｉ^{z}ɿ〕植える

注）城辺町保良、新城、池間島などの方言では、二重母音／ａｕ／／ａｏ／なども融合せず、二重母音のまま保存されている。

4.4. 子音フォネーム

平良方言の子音フォネームを、(1)調音の方法、(2)調音の位置、(3)声門の状態、(4)口蓋音化と唇音化の有無、のよっつの基準にしたがって分類することができる。平良方言の子音フォネームは、調音の方法によって、破裂音、破擦音、摩擦音、鼻音、流音、半母音にわかれる。破裂音、破擦音、摩擦音は、さまたげ音(obstruents)であり、鼻音、流音、半母音は、ひびき音(sonants) である。調音の位置でみると、両唇音、唇歯音、前舌音、奥舌音、声門音がある。調音の位置に唇歯音（上の前歯と下唇の摩擦音）があるのは、平良方言の特徴である。

声門の状態、すなわち、声門における振動の有無によって、子音フォネームは、有声音と無声音にわかれる（声帯が振動するばあいを有声音、振動がないばあいを無声音という）が、平良方言のばあい、さまたげ音は無声音と有声音の対をもっているが、ひびき音はすべて有声音である。奄美沖縄方言群の多くの方言にみられる喉頭／非喉頭の対立がみられないのも平良方言の特徴のひとつであろう。

(1)	(3)	(2)	両唇音	唇歯音	前舌音	奥舌音	声門音
さまたげ音	破裂音	無声音	p pj		t tj	k kj (kw)	
		有声音	b bj		d dj	g gj (gw)	
	破擦音	無声音			c cj		
		有声音			z zj		
	摩擦音	無声音		f fj	s sj		(h)
		有声音		v vj			
ひびき音	鼻　音	有声音	m mj		n nj		
	流　音	有声音			r rj		
	半母音	有声音	(w)		j		

( )内は、語例の少ない、周辺的なフォネームである。

さきにものべたように、平良方言の子音フォネームを単語内での位置や音節形成への参加のしかたという観点から以下のように分類することができる。

- みじか子音フォネーム
  - 音節をひらく子音フォネーム
    p, b, t, d, k, g, r, j, pj, bj, tj, dj, kj, gj, fj, vj, sj, mj, nj, rj, kw, gw, h, w,
  - 音節をつくる子音フォネーム
    f, ʋ, s, m, n
- ながフォネーム
  ʋ:, m:, n:

平良方言の子音フォネームは、みじか子音フォネームとながフォネームにわかれる。

ɱma	祖母	ɲkaɿ	向かい
ɱ:ma	芋は	ɲ:kaɿ	似ている

平良方言のながフォネームは、うえの例のように単独で音節を形成し、単語をあらわすことができる。子音フォネームに長短の区別のあることを平良方言の音声的な特徴のひとつとしてあげることができるだろう。

みじか子音フォネームには、音節をひらく子音フォネームと、音節をつくる子音フォネームの2種類の子音フォネームがある。音節をひらく子音フォネームは、開音節の音節をひらく位置（①）にしかくることのできないものである。音節をつくる子音フォネームは、単独で音節を形成するばあい、②語頭、③語中、④語尾のいずれの位置にもくることができる。また、音節をひらく子音フォネームは、開音節の音節をひらく位置（①）にもくることができる。

①〔pa:〕歯	〔du:〕胴	〔mi:〕目
②〔ɱta〕土	〔ɣda〕太い	〔ɲkɿ〕神酒
③〔akaɱta〕赤土	〔kiɣʂ〕煙	〔akaɲga〕赤ん坊
④〔kaɱ〕神	〔kuɣ〕昆布	〔kaɲ〕蟹

平良方言の子音フォネームの音節形成能力を簡単に表にしめす。

	単独で音節を形成できる	単独で音節を形成できない
音節をひらくことができる	音節をつくる子音フォネーム	音節をひらく子音フォネーム
音節をひらくことができない	ながフォネーム	

4.4.1. みじか子音フォネーム

4.4.1.1. 音節をひらく子音フォネーム

音節をひらく子音フォネームは、口蓋音化を特徴とする子音フォネーム（拗音節をつくる子音フォネーム）と、唇音化を特徴とする子音フォネーム（合拗音節をつくる子音フォネーム）、口蓋音化も唇音化も特徴としない子音フォネーム（直音節をつくる子音フォネーム）のみっつのグループにわけることができる。

音節をひらく子音フォネームは、つねに母音フォネームとむすびつき、音節をひらく位置にくる。

口蓋音化も唇音化も特徴としない子音フォネーム
／p，b，t，d，k，g，c，z，r，(h)／
口蓋音化を特徴とする子音フォネーム
／pj，bj，tj，dj，kj，gj，cj，zj，fj，vj，sj，mj，nj，rj，j／
唇音化を特徴とする子音フォネーム
／(w，kw，gw)／

口蓋音化を特徴とする子音フォネームには、破裂音(pj，bj，tj，dj，kj，gj)、破擦音(cj，zj)、摩擦音(fj，vj，sj)、鼻音(mj，nj)、流音(rj)、半母音(j)の調音方法がそろっているが、口蓋音化も唇音化も特徴としない子音フォネームには、破裂音（p，b，t，d，k，g）、破擦音（c，z）、流音（r）、摩擦音（h）があるが、鼻音などが欠けている。この欠けている鼻音（m，n）や摩擦音（f，v，s）は、音節をつくる子音フォネームである。唇音化を特徴とする子音フォネームは、いずれも語例がすくなく、周辺的なフォネームである。

4.4.1.2. 音節をつくる子音フォネーム

音節をつくる子音フォネームは、すべて口蓋音化も唇音化も特徴としない子音フォネームである。そして、調音方法の面からみると、鼻音、流音、摩擦音である。／m／／n／は鼻音で、ひびき音のグループに属するのであるが、／s／／f／／v／は、摩擦音で、さまたげ音のグループに属する。音節をひらく子音フォネームに共通の音

声上の特徴をあげるとすれば、いずれも継続音だということだろう。この継続音であることが、子音としての独立性、すなわち、単独で音節を形成できる能力を保証しているのであろう。

音節形成能力の観点からみると、音節をつくる子音フォネームの摩擦音と鼻音は、音節をひらく子音フォネーム、たとえば、破裂音や鼻音、流音にくらべて、多様な音節形成の仕方をする。

C_1 C_2 V_1 C_3

摩擦音と鼻音は、うえにしめした、C_1・C_2・V_1・C_3 のいずれの位置にもたつことができる。C_1 は、直接母音フォネームと結合することなく、語頭にきて、子音フォネーム単独で音節を形成するばあいである。C_1 の位置にくる音節をつくる子音フォネームがそれのみで単語をあらわすことはなく、つねに子音が後続する。このとき、子音C_1 は単独で１モーラにかぞえられる。

①〔ʂ s aɱ〕しらみ　〔ɸ f u k a ɹ〕黒い　〔ʋ ʋ a〕おまえ
〔ɱ m a〕祖母　〔ɳ n u ts ɹ〕命

②〔ʂ d a〕舌　〔ɸ s a〕草　〔j a n a ʋ ts ɹ〕悪口
〔ʂ t a〕下　〔ɸ m u〕雲　〔ʋ d a k a ɹ〕太い
〔ɱ t a〕土　〔ɳ g^z ɹ〕棘

①のようにおなじ子音が連続するばあい、これまで摩擦音（さまたげ音）が連続するとつまる音（促音）／Q／に、ひびき音（鼻音）が連続するとはねる音／N／として解釈されることがあった。

②のように、調音方法、調音点がことなる子音が後続するとき、鼻音のばあいには、(1)とおなじように、はねる音として解釈するが、摩擦音のばあい、／s／であれば、舌先母音／ɹ／をおぎない、／f／であれば、奥舌せま母音／u／をおぎなって解釈された。そのとき、後続する子音が無声子音であれば、／s ɹ／〔s ɨ〕、／f u／〔f ɯ〕のように無声化した母音があるとみなされていた。

まず、〔ɸ s a〕についてみてみる。〔ɸ s a〕において〔ɸ〕と〔s a〕のあいだに宮古方言に特徴的な円唇の母音〔u〕は観察されない。すなわち、C_1 からC_2 にかけての部分に母音／u／は観察されない。

〔ɸ m u〕において、〔ɸ〕と〔m u〕との間にも母音／u／は観察されない。す

なわち、C_1 からC_2 にかけての部分にも、／ｆｆｕ－／のC_1 からC_2 にかけての部分と同様に円唇の母音／ｕ／は観察されない。もし、母音らしきものが観察されるとすれば、そのC_2 が／ｍ／のような有声音であるばあい、C_1 部の／ｆ／からC_2 部に連続する部分において、そのC_1 の／ｆ／の持続部の後半に有声音のひびきがきかれることがある。しかし、それは円唇母音の／ｕ／がそこにあるのではなく、依然として、下唇の裏側と上歯とのあいだでせばめが形成され、そこで調音されている。下唇の内側が上歯へのかるい接触による摩擦音〔ɸ〕から、〔ｍ〕における両唇の閉鎖による鼻腔での共鳴にいたるまで間平良方言の〔ｕ〕に特徴的にみられる両唇をつきだした円唇の母音の発声のための動きはみとめられず、逆に〔ɸ〕の直接的な同化作用によって後続する〔ｍ〕が単なる両唇を調音点とする鼻音ではなく、下唇と上歯とを調音点とする鼻音〔ｍ〕のような発声が観察されるばあいさえみられるのである。C_1 部分をつまる音／Ｑ／と解釈する研究者もいることから、C_1 からC_2 にかけて母音／ɿ／や／ｕ／が実際に発音されていないことがわかる。たとえば、〔ɸｆｕｋａɿ〕「黒い」のC_1 からC_2 にかけての部分には宮古方言の母音／ｕ／に特有な唇の丸めがほとんどみられず、唇の内側の部分が下歯に接触したままの状態でC_2 へ連続していって、C_2 からつぎのV_1 部分においてはじめて唇の内側と下歯の接触が解かれ、唇のまるめをともなった母音／ｕ／が発音されるのである。このC_2 V_1 部の／ｆｕ／に典型的にみられるような円唇の奥舌母音／ｕ／はC_1 からC_2 にかけての部には観察されない。〔ɸｋｕｒｕ〕袋のばあいも同様である。

C_2 は、母音とつよい結びつきをなし、音節をひらく位置にきて１個の音節を形成し、みじか母音と結合したときにはその音節が１モーラにかぞえられ、なが母音と結合したときにはその音節が２モーラにかぞえられるような子音である。C_1 やC_3 が子音それだけで１モーラにかぞえられるのに対して、このC_2 は、子音フォネームそれのみではモーラにかぞえることができない。つまる音、はねる音をのぞく日本語標準語の子音がこのような子音である。音節主音であるV_1 に対して、C_2 は音節副音といわれる。

③〔ｓｏː〕竿　　〔ｆａː〕子　　〔ʋａː〕豚
④〔ｓａ̠ｔａ〕砂糖　　〔ɸｆｕｋａɿ〕黒い　　〔ɣｖａ〕おまえ

C_3 は、語末にくる子音で、その子音のみで１モーラにかぞえられる。平良方言のばあい、C_3 の位置にくることのできる成節的な子音には、は鼻音〔ｍ̩〕〔ｎ̩〕、摩擦音〔ɸ̩〕〔ɣ̩〕〔ｓ̩〕がある。

⑤〔ｉm̩〕海　　〔ｍｉm̩〕耳
〔ｉn̩〕犬　　〔ｋａn̩〕蟹
〔ａf̩〕蒸菓子の名　　〔ｋｉf̩〕蒸気
〔ａɣ〕炙る　　〔ｐａɣ〕蛇
〔ｉs̩〕石　　〔ｐｕs̩〕星

おおくの研究者もC₃の位置にくる鼻音〔m̩〕〔n̩〕、有声の摩擦音〔ɣ〕を成節的な子音とみとめるが、無声の摩擦音〔f̩〕〔s̩〕がC₃の位置にくるばあいは、母音フォネームをおぎなって解釈することがある。これはC₁のばあいと同様に、語末の母音が無声化している（〔ｆu̥〕〔ｓɿ̥〕）とかんがえるのである。

たしかに、平良方言のせま母音／ｕ／／ｉ／は語末で無声化したアロフォン〔u̥〕〔i̥〕があらわれるし、無声子音にはさまれたときほど、語末の無声化は義務的ではなく、無声化しないこともある。C₁の成節的な子音／ｆ／／ｓ／に有声子音が後続するときのように、語末に／ｆ／／ｓ／がくるときも、子音のでわたりに声帯の振動がきこえることがある。しかし、C₁のばあいと同様に、語末の〔f̩〕のあとに、母音／ｕ／の調音に特徴的な唇のまるめはみられない。

C₃に成節的な子音がくる名詞は、対格の助辞-ｊｕ（標準語の「を」に対応）、あるいはとりたての助辞-ｊａ（標準語の「は」に対応）を後続させた文法的な形は語末の子音をかさねるという特徴をもっている。これはC₃の位置にたつ鼻音／ｍ／／ｎ／のばあいも同様であり、語末に母音が存在しない、いわゆる成節的な子音を語末にもつ名詞に共通の特徴である。

⑥／ｎｕｍ／蚤　　／ｎｕｍｍｕ／蚤を　　／ｎｕｍｍａ／蚤は
／ｋａｎ／蟹　　／ｋａｎｎｕ／蟹　　／ｋａｎｎａ／蟹は
／ｊａｆ／厄　　／ｊａｆｆｕ／厄を　　／ｊａｆｆａ／厄は
／ｐａｓ／橋　　／ｐａｓｓｕ／橋を　　／ｐａｓｓａ／橋は
／ｐａｖ／蛇　　／ｐａｖｖｕ／蛇を　　／ｐａｖｖａ／蛇は
／ｆｓｕ／糞　　／ｆｓｕ：／糞を　　／ｆｓｏ：／糞は
／ｆｆｉ／イカの墨　　／ffju：／墨を　　／ffja：／糞は

子音フォネームがV₁の位置にくる例としては、つぎのふたつの語例がある。

⑦〔m̩ｔtsa〕道は　　〔f̩ｔtsa〕鯨

〔m̩ttsa〕も、〔f̩ttsa〕も、〔attsa〕<下駄>が〔at〕〔tsa〕のふたつの音節にわかれるのと同様に、〔m̩t〕〔tsa〕、〔f̩t〕〔tsa〕のようにふたつの音節にわけることができる。このとき、成節的な子音〔m̩〕〔f̩〕は、〔attsa〕の〔a〕と同様に、音節主音として音節形成に参加しているのである。この音節は、2モーラにかぞえられる促音でおわる閉音節である。

〔m̩t〕の発音において、〔m̩〕の口むろと鼻むろでの共鳴の発音のあいだ、当然のことながら、くちびるはとじられたままである。そのくちびるをとじた状態から舌先での閉鎖があって〔t〕が発音されるが、そのときもくちびるはとじられたまである。そのくちびるの閉鎖につづいて〔tsa〕が発音されるのである。〔f̩ttsa〕の発音における、〔f̩t〕の発音も同様である。〔f̩〕の上歯と下くちびるのかるい接触があって（そのとき前舌による閉鎖はないようである）、つよい呼気による摩擦音があり、前舌による閉鎖〔t〕がつづくが、そのあいだも上歯と下くちびるの接触は積極的には解消されずのこっている。

この〔m̩〕〔f̩〕は、〔attsa〕の発音における音節〔at〕の音節主音(V_1)の役割をはたしている母音フォネーム／a／と同様に、音節主音(V_1)としての役割をはたしているのである。

ネフスキーはかつて「人」という単語を「psu」、「平良」を「psara」と表記していたことがある（ネフスキーは〔p^{s}ɨtu〕とも表記したし、われわれは現在これを／pɿtu／〔p^{s}ɿtu〕とみなしている）。

〔pṣtu〕は2モーラにかぞえられる単語で、全体が〔pṣ〕〔tu〕のようにふたつの音節にわかれる。最初の部分では破裂音〔p〕の発声のときに、すでに、舌先、あるいは前舌の舌先寄りの部分を歯茎あるいは歯茎寄りの口蓋に接近させていて（これは宮古諸方言のC_2の位置にくる〔s〕の発声とおなじ）、そこからそのままつぎの〔t〕へ移行するのである。音節主音的な〔ṣ〕と無声化した舌先母音〔^{s}ɿ〕とは同一のものであって、そのちがいは音韻論的にいかにとらえるかというちがいである。ふたつの考え方が想定できる。

第1の考え方は、音声的な共通性を重視して、音節主音的な〔ṣ〕も、音節副音になる／s／のアロフォンとみるものである。／s／〔ṣ〕が〔k〕や〔p〕に対して音節主音として機能していることになり、／pstu／となる。この考えによれば、平良方言の摩擦音の／s／は、母音と結合することなく独立性のつよい子音として語頭にきたり（C_1）、音節末の閉音節をつくる位置にきたり（C_3）、その子音単独ではモーラにかぞえられず、母音と結合してはじめて音節を形成し、モーラにかぞえられる、音節副音として音節を開く位置にきたり（C_2）、また、他の子音、すなわち／p／／k／のような無声の破裂音と結合して、1拍にかぞえられる音節を形成し、

その音節主音となることができる子音フォネームということになる。そうすると、摩擦音／ｓ／は、／ｓｕ：／（野菜）にみられる音節副音としても、／ｕｓ／（牛）の語末の／ｓ／〔ṣ〕のような成節的な子音（モーラを形成する子音）としても、母音のように音節主音的な子音としても機能する、多機能な子音フォネームということになる。

第２の考えは、音節主音として機能する〔ｉ〕が母音／ｉ／で、音節副音として機能する〔ｉ〕が子音、すなわち半母音／ｊ／である、というのにならって、いかに機能するかということを重視してフォネームを決定するなら、音節主音としての〔ṣ〕と音節副音としての〔ｓ〕を区別して、それぞれを別のフォネームとしなければならない。この音節主音として機能している〔ṣ〕を舌先母音／ɿ／〔^{s}ɿ̩～^{s}ɿ～^{z}ɿ～ɿ〕とみなすのである。ここでは、おおくの研究者の見解にしたがって、これを母音フォネームとみなし、舌先母音／ɿ／とする。

舌先母音／ɿ／は、無声子音と結合するときには、〔^{s}ɿ～^{s}ɿ̩〕というアロフォンがあらわれ、有声子音と結合すときには、〔^{z}ɿ〕というアロフォンがあらわれる。アロフォン〔^{z}ɿ〕は、有声の摩擦音〔ｚ〕と調音の位置、調音の方法がおなじである。前者を／ｓ／のアロフォンとみるなら、後者は有声摩擦音〔ｚ〕のアロフォンとみなければならない。

注）「音節主音」とは、２個以上のフォネームからなるひとつの音節において、他のフォネームに対して相対的によくひびき、その音節の核となることのできるものである。〔ｍｉ〕における母音〔ｉ〕がそういうものである。しかし、この母音〔ｉ〕がよりきこえのおおきい母音〔ａ〕の前にきて、かたいむすびつきをなし、一つの音節を形成して、「音節副音」としてはたらく。これが半母音／ｊ／である。おなじように、音節副音としてはたらく〔ｕ〕が半母音／ｗ／である。音節副音としての機能は子音に特徴的であり、半母音は、子音のグループに分類される。このとき、半母音は子音にふさわしい音声を実現するためによりせばめられたり、摩擦がつよくなったりすることがあるようだ。

平良方言はモーラによってかぞえることができる方言であり、〔ｐṣｔｕ〕も〔ｋṣｍｕ〕も２モーラにかぞえられる単語である。この単語内において〔ｐṣ〕〔ｋṣ〕が相対的に独立した、１モーラにかぞえられる１個の音節としてとりだされる。この音節内において〔ṣ〕は音節主音として機能している「半子音(Semi-consonant)」とよぶべきものである。半子音とはつぎのようなものである。

子音(Consonant) でありながら、きこえ度(Sonority)が高く、音節主音(syl

labic)としての働きをもつ音をいう。Broomfield (Language, P. 121) によると、前後の音素(Phoneme) よりも、きこえ度の高い音素は音節主音であり、その他の音節は音節副音(Nonsyllabic) である。この中間に、音節主音にも音節副音にもなりうる、いくつかの音素があるが、これを響音(Sonorant[sonant])と呼ぶ。響音には〔l, n, r, w, j〕がある。このうち、〔r〕は、red[red] では音節副音であるが、bird[brd] では音節主音の働きをしているので、半子音とみなすことができる。

『現代英語学辞典』(1973初版, 1975参版)

平良方言のばあい、〔pˢɻ〕〔kˢɻ〕の舌先母音／ɻ／は、／s／とほぼおなじ調音方法によって生成されるのであるが、音節副音としての破裂音〔k〕〔p〕に比較して、調音点の「せばめ」の程度がすくなく、相対的にきこえ度がたかいうえに、発声時間の持続の度合いがたかいので、音節主音として機能しうる。平良方言の〔s〕は、この点から響音（ひびき音）のグループにいれることができるだろう。

また、平良方言の〔m̩ttsa〕の〔m̩〕、〔f̩ttsa〕の〔f̩〕、多良間島方言の〔bɭ：bɭ：gassa〕<くわず芋>のそり舌の側面摩擦音〔ɭ：〕が音節主音となり、大神島方言の〔kf̩fi〕<作る>の唇歯摩擦音〔f̩〕が音節主音となるなど、宮古諸方言のなかには、半子音とよぶべき子音があって、半子音の生成のプロセスをかんがえるうえで、興味ぶかい。音節主音になることのできる／s／／m／／f／／l／を半子音とみなすなら、宮古諸方言では、鼻音／m／、流音／l／はもちろんのこと、摩擦音／s／／f／も、ひびき音とみなすことができるだろう。

4.4.1.1. 破裂音／p, b, t, d, k, g／

平良方言の破裂音は無声破裂音の／p, t, k／と有声破裂音の／b, d, g／の6個である。平良方言の無声破裂音は、語頭において〔pʰ〕〔tʰ〕〔kʰ〕のように表記したくなるほど、母音へのでわたりに際しての呼気がつよい。有声破裂音／b, d, g／は、和語においては擬声擬態語をのぞくと、原則として、語頭にくることがないが、平良方言においては、語頭にも頻繁にあらわれる。有声破裂音が語頭にくる単語は、標準語との対応（あるいは語源）が不明のものがおおい。